インタビュー

先号では在住ブラジル人の皆様にお話をうかがいました。今号ではブラジルに駐在した日本人の方にブラジルでの生活についてうかがいました。ブラジルに行ってみたくなるかもしれません。

お 名 前：村上　むつみさん
駐 在 地：リオデジャネイロ
駐在期間：1991年～1996年
目　　的：夫の転勤
同行家族：夫婦と息子（当時１才と４才）

お 名 前：石川　紀美恵さん
駐 在 地：サンパウロ
駐在期間：1991年 8月～1995年 8月
目　　的：夫の転勤
同行家族：夫婦と息子（6才）娘（3才）（当時）

Ｑ１：ブラジルに行かれて、どんなことが気になりましたか？

村上：まず、言葉がまったくできなかったので困りました。子ども達も幼かったので、現地へ行ってから必死に勉強しました。当時の駐在員は住み込みのメイドさんを雇うのが普通でしたので、メイドさんとコミュニケーションをとるためにも必要でした。夫婦同伴で夜、外出することも多かったので、メイドさんは必要でしたね。
ブラジルに行く前に衛生面では問題があると聞いていたので、最初はおっかなびっくりでしたが、食事は素材が豊かでとても美味しかったです。日系ブラジル人の方のおかげで、日本食も充実していました。果物はとてもおいしいし、お酒や、もちろんコーヒーも…。コーヒーはほんとうによく飲みます。甘い“カフェジーニョ”というものや、朝は“カフェコンレイチ”というカフェ・オレと似たようなものを飲みます。
物価は安かったのですが、贅沢品は高価でした。貧富の差がありますので、車やパソコンなどは日本のようには普及してはいませんでした。当時は紙おむつが無くてビックリしました。現在は経済成長が著しいと思います。

石川：突然の夫の海外赴任で、また、欧米とは違い情報も少なく馴染みのない「ブラジル」という国にビックリしました。
あまりにも遠い国で時差もあり、現地に着いた早々、子ども達が部屋で夜、騒いでしまいました。すると翌日、下の住人が「うるさい！」とのことで早速管理人から電話が入ってしまいました。それもポルトガル語で話してきて、通訳してもらってようやく状況を把握。言葉がポルトガル語しか通用せず、「ミルク」「バター」すらの英語も通じなくて「大変なところへ来てしまった」というのが第一印象でした。周辺には駐在員の方や日系の方々が多く、食事は、しいたけやお醤油・お豆腐に至るまで現地で調達することができ、あまり不自由は感じませんでした。
サンパウロでは、日系の医師が多く特に歯科医師が多いようで、歯の治療も進んでいます。その医師の中には、祖父母から「日本語」を聞いていたので、「日本語」で話しかけてきた方もいました。
お国柄で、食べ物が豊富にあって暖かいせいか、生活が貧しくてもみんな明るく生きているという印象です。
ファーストフード店などでテーブルの上に置き忘れた物はすぐに失くなり、「置き忘れた方が悪い」という思いを強く感じてしまうほどでした。また、車のタイヤをパンクさせられて困っていると、別の人が助けてくれるという、まったく逆の現象もあったりして、不思議な気がします。
基本的には、治安はあまり良くなかったと思います。

Ｑ２：ブラジル人の人たちの暮らしぶりで、印象的なことは？

村上：ブラジルには移民が多いですし、混血も進んでいますから。リオデジャネイロに 3世代住むと「カリオカ」＝リオの人と呼ばれるそうです。
また、貧富の差があり、地域によっては治安も悪かったです。夫は車で走っている時に襲われて、車をとられたことがありました。私も街に出るとストリートチルドレンから声をかけられました。お国柄でしょうか、ブラジルの人たちはとても人柄が良いのに、こういうことも混在しているのは不思議です。
サッカーはどこでもやっています。上の息子は日本人学校へ通っていたのですが、ジーコが指導に来てくれたり、本当に国中で盛んですし、生活の一部になっているのではないでしょうか。
また、よくブラジル国内を旅行しました。週末には海やピクニックにも行きました。北の赤道近くにあるレシフェという所や、アマゾンのジャングルをカヌーで旅行し、スコールでずぶ濡れにもなりました。有名なイグアスの滝はエネルギーを感じる場所でした。リオのカーニバルにも参加しましたし、本当に楽しかったです。
親日家が多く、それは日系ブラジル人の方たちのおかげだと思います。あとは気候もよく、時間の流れが緩やかで、とてもリラックスできました。もちろん、良い事ばかりではなく、不自由なことも多かったし、恐い目にも遭いましたが、いい思い出がたくさんあります。
とても遠いので、行くまでが大変ですが、いつかはまた訪れてみたい、懐かしい所です。

石川：日曜日など休日は、スーパーなどもお休みになってしまうため、土曜日にまとめて買い物をします。休日は、テニスやゴルフ、プールなどで楽しんでいます。
「リオのカーニバル」は、派手な衣装を纏ったり、大胆に肌を出したりして夜通し延々とサンバのパレードが続きます。
さすが、サッカー国でもあり至る所でサッカーをしている風景が見受けられます。
また、暑い国でもあり、果物が豊富で種類も多く、オレンジなどはとても安く手に入り、いつでも家で絞って飲むことが出来ます。土地が広く、日系の農業生産者の方も多いため、梨やりんご、柿などの日本的な果物もたくさん生産されています。コーヒーもかなり濃いため、ミディカップにお砂糖を多く入れ甘くして飲んでいます。コーヒーもまた、至るところで飲むことが出来ます。

小さいお子様を連れての初めての海外赴任。日本の真裏にあたるブラジルで体験された興味深いお話をしていただき有難うございました。
（青柳・相沢・伊東・福地・日地谷）

海外生活レポート
アフガニスタン 13

Norko Dethlefts（紀子・デスレフツ）さん

ヘラートからカブールへ ●●●●●●

9月の便りをお送りした直後にCBM本部から、大至急カブールに移って欲しいとの要請がありました。それからはまるで早送りボタンを押したような毎日で、仕事を片付け、荷物をまとめ、掃除をし、みんなにお別れをし…その全てをわずか 10日間で済ませました。トラックのオーナーで荷物を運んでくれる、いわゆる引越屋が集荷に来たのですが、「英語の本や書類や DVDはしっかり隠しておかないとだめだよ」と注意され、大慌てで 16個のトランク全部の中身をチェックし直し、本は一番底に押し込みました。その引越屋が言うには外国人や外国の物を運ぶのはとても危険で、見つかると全て焼き払われるか破壊されるだろうし、自分は殺されるかもしれない、とのこと。どこまでが、危険手当の名目で料金をつり上げる口実なのか知る由もありませんでしたが、途中でトラックが故障するというアクシデントがあって荷物はすべて手荒く別のトラックに積み替えられたのに、大部分が無事に到着したのには本当に感謝しました。あとで分かったのですが、うちの荷物はイランからの引揚げ者一家の荷物だということにして運んだ !?そうです。

歯科診療はスペイン軍の駐留地で ●●●●●●●

ヘラートを発つまでは本当にすごいストレスで、気が滅入ってしまいました。そんな中で私の歯にひびが入って、いろいろ交渉した結果、スペイン軍の従軍歯科医に見てもらえることになり、またしても珍しい経験をすることになりました。約 1,000人のイタリア軍兵士たちの間を縫って、至る所に戦車や武器が見えるのを出来るだけ平静を装って通過すると、300人くらいのスペイン軍部隊の駐留地に到着しました。そして、とても優しい歯医者さんに治療してもらえました。意思疎通は主に手話でしたけれど。軍隊の駐留地って、見渡す限り兵士の住むテントが並んでいて、まるで難民キャンプのようです。テントにエアコンがついているところが大きな違いですが！兵士たちのほとんどは駐留地を出てはいけないことになっているので、町中がどんな風なのか全く知りません。私たちが隔離されず、現地の人々と知り合ったり、一緒に仕事ができたりすることを本当に嬉しく思いました。2年半の間にできた多くの素晴らしい友人たちの愛と気遣いを心に留めつつ、悲しかったけれど感謝に満たされて私たちはヘラートを後にしました。

カブールの新しい住居（スタージ） ●●●●●●●●●

カブールの新しい住居は、崩れかかった建物の隣にあります。向かいにはひどく人目を引く建物があって、ぼさぼさ頭のむさ苦しい身なりの男たちが武器を手に警備にあたっています。朝、門の所まで出ると、たいてい何十匹という山羊が道路の至る所に散乱するゴミを嬉しそうに食みながら、おはようの挨拶をしてくれます。目を上げると遠くには褐色の山の峰が連なっていて、雪に覆われたらさぞ美しいことでしょう。冬には室温が 15℃以上になったことがなく、水道管は凍りつって 7週間も水道水が使えないというこのコテージを、私たちは少々お金がかかっても、戸口をブランケットで覆い窓ガラスにもビニールシートを貼って、石油ストーブの暖を少しでも保つようにするつもりです。

首都カブールは… ●●●●●●●●●

人口 500万人を擁するこの首都は、多くの人が困難を抱えている上に、安全上の問題にも悩まされています。私たちがここで暮らし始めた最初の１週間は 3回も自爆テロが起き、多数の死傷者を出しました。
市場（バザール）では、日々の生活に必要な最低限のものはほぼ揃います。但し、食べ物の賞味期限とか衛生状態を気にしなければ、ですが。大きく口を開けて置いてあるお米や豆の袋には鳥が羽を休めているし、虫たちは開いたビスケットの箱に入ってせっせと味見をしています。私の友人は買った卵の中からひよこの死骸が出てきたと言っていたし、私が買った冷凍チキンにはスズメ蜂が入っていました！食料品を買いに市場に行くだけでもひと仕事です。乗り物の運賃の交渉、人ごみ、そして物価高。物価はヘラートよりも高くて、特に外国人相手だと更につり上がります。でも自転車に乗れるので、私はこの地域への買物や仕事にも自転車で行っています。（雪が降るまではこれができるので、）けれど外出する時にはとにかく気をつけるようにしています。私たちと引き換えに多額のお金が手に入るなんて思う人が出てこないといいと祈っています。

眼科医療プロジェクト ●●●●●●●●●

夫がいま取り組んでいるプロジェクトは、診察したり教えたりすることのようには一筋縄ではゆかないようです。全国レベルでの眼科医療プログラムの実質的改善事業を実施するために、彼は政府とも交渉しています。信じられないほどずるがしこいやりとりや複雑な政治絡みの交渉の中でも、彼は目的をしっかり見据えて、健康のケアに手の届かない人々に何とかして手を差し伸べようと熱意を傾けて頑張っています。

愛と感謝をこめて　紀子

世界の食卓から

ブラジル料理
― フランゴ・アッサド ―
（ブラジル風ローストチキン）

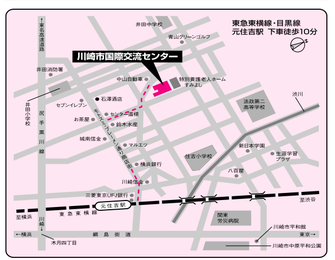
材料（１羽分）

若鶏	1羽
若鶏の内臓（肝臓、心臓）	100g
タピオカの粉	250g
レモン	2個
にんにく	3かけ
ゆで卵	1個
たまねぎ	1/2
やしの芽	2本
パセリ	1束
塩、こしょう	少々
オリーブ油	大さじ３

作り方

1. 塩、こしょう、つぶしたにんにく 2かけをレモン汁に入れる。材料を漬け込み、チキンの外側や腹の内部に塗り、一晩寝かせる。何度も裏返しを繰り返す。
2. チキンの中に入れる具：タピオカの炒った粉、内臓、にんにく 1かけ、みじん切りのたまねぎ、パセリ、つぶしたゆで卵、刻んだやしの芽、オリーブ油（大３）、塩とこしょう。
3. 熱したオリーブ油の中に、にんにくを入れて炒め、続いて内臓を入れ炒める。残った 2の材料を入れる。最後にタピオカの粉を入れて味を調える。
4. チキンのお腹の中に炒めた具を詰め、口を楊枝で止める。200℃のオーブンで 55分焼く。

編集後記

今年は「日本人がブラジルに移住して 100周年」ということで、前号に引き続きブラジルのことをもっと知っていただくため特集記事にまとめました。
自然、スポーツ、芸術そして人々…。魅力いっぱいのブラジルをお届けできたのではないでしょうか。
日本からは遠い南米の国“ブラジル”を身近に感じて、人々との交流が広がっていくことを願っています。

川崎市国際交流センター
〒 211-0033　川崎市中原区木月祇園町 2番 2号
TEL 044－ 435－ 7000　FAX 044－ 435－ 7010
http:// www.kian.or.jp/ kic/